

夏目漱石『門』論

——宗助と子供に関連して——

沢柳賢二

始めに

『門』は『それから』発表の翌年、明治四十三年三月一日から六月十二日にかけて朝日新聞に連載された。『門』の研究において宗助と御米夫婦の〈愛〉が取り上げられることが多い。『門』が発表された年の十一月、谷崎潤一郎は「信仰の対象なく、道徳の根柢なく、荒れすさんだ現実の中に住する今日の我々が幸福に生きる唯一の道は、まことの道は、まことの恋によって永劫に結合した夫婦の愛情の中に第一義の生活を営むにある、これが『門』の作者の我々に教ふる所である」と述べ、『門』の中で描かれているのは夫婦の〈愛〉であるとした。〔「門」を評す』『新思潮』〕またこの評論を引用した江藤淳は、谷崎は「この作品を、一篇の充足した、理想主義的な夫婦愛の小説として読んだのであって、これ以外に『門』の正当な読み方はない」とまで述べている。^{〔注1〕}

これらのような『門』に野中夫婦の〈愛〉をみる読み方がある一方、その論に疑問を呈するものもある。西垣勤は「理想主義的な夫婦愛」ということば自体気になる、どうしても納得できない表現でしかない」と述べている。西垣は、御米が流産の苦悩を宗助に打ち明ける場面をあげ、「打ち明けたところで宗助は「さすがに好い気持はしなかった」が「わざと鷹揚な答をしてまた寝てしまった」だけ」であり、「二人の間の裂け目は明らか」であると指摘した。^{〔注2〕}

このような夫婦の〈愛〉の「裂け目」に注目するものは、作品中の御米の描写をとりあげることが多く、そこには興味深い示唆に富んだものが多い。たとえば、前田愛は野中家の六畳の居間に注目をし、「御米の居間は、宗助夫婦の住まいのなかでもっとも深い翳を淀ませている場所とっていいだろう。御米が見つめる鏡は、三人の子どもを死なせた暗い過去の記憶が引きだされてくる時間の断り口であり、この部屋にこもることで御米は宗助すら立ち入ることがゆるされていない無意識の悩みにその身体を委ねるのである」と指摘した。^(注5) 御米には宗助に見せない「悩み」があり、それが「子どもを死なせた暗い過去」に結びついているという指摘は、宗助と御米の関係をみるうえで、忘れてはならないものである。

御米にとつての流産は罪の意識と結びついている。「易者」(十三)の「貴方は人に対して済まない事をした覚がある。その罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない」(十三)という発言により、子供の死は安井を捨てたという自身の過去に結びつけられているのである。子供を生みそれを育てていくことは、現在の御米の幸福へと繋がる。しかし、過去の罪によつてその幸福は訪れることはないと言者に告げられたのである。現在の幸福が過去の罪によつて閉ざされてしまった御米の苦しみは計り知れない。この御米の苦しみについて高橋秀晴は「子供が育たないことを巡る認識の違いを例にとれば、それが因果によるものであれ不注意によるものであれ、御米の罪の意識の深さは宗助の比ではない」と述べている。^(注6)

たしかに、子供が育たないことへの罪の意識は御米にとつて強烈なものである。しかし、宗助が子供が育たないことを軽視しているわけではない。子供の存在は、妻にとつてだけではなく、夫にとつても重要なもののはずである。^(注7) 『門』の研究において、子供と御米については多く論じられているが、子供と宗助についてはあまり論じられていないようである。宗助にとつて子供はどのような意味をもっているのだろうか。本論では、子供と宗助の意識の関連を

手掛かりに『門』を論じる。

一 〈家〉と宗助

『それから』の代助と『門』の宗助を比較すると、それぞれの実家の経済事情は似ている。代助の父得は「大分の財産家」(三)で、兄の誠吾も父の關係する会社に入って重要な地位を占めており、代助は「親の金とも兄の金ともつかぬものを使つて生きてゐる」(三)、つまり資産家である実家の財産の余剰にありつき生活をしていた。『門』の宗助も「相當に財産のある東京ものの子弟として、彼等に共通な派手な嗜好を学生時代には遠慮なく充たした男」(十四)であり、二人とも実家が相當の財産を有していること、また金銭的な不自由を感じることなく青年時代を過ごしたしたことにおいて共通している。

だが、二人の設定には見過ごしてはならない相違がある。石原千秋が注目しているように『それから』の代助は次男であり、「誠吾が戸主になれば、長井家における代助の扶養を受ける権利の優先順位は下がってしまう」存在であった。^(注8)それ故に代助にとつて〈家〉を継続発展させる義務は軽い。また別稿で述べたように、^(注9)代助は父の庇護下で生活しているが、旧時代の道義を信用しておらず、彼にとつて父との徳義上の繋がりは希薄である。義務、徳義において実家との繋がりの薄い代助は、〈家〉という制度から受ける重圧はさほど感じていない存在なのである。一方で『門』における宗助は野中家本家の長男として生を受けている。実家の保有する財産の相続権は宗助にあり、それは同時に〈家〉を繁栄させる義務として、立身出世や子孫を残さなければならないという重圧が常に存在していたと考えられる。

二 成功者への感情の変化

宗助が順当な人生を歩んでいたならば、伊藤博文^(注10)を代表とする社会的な成功者や、坂井^(注11)のような子宝に恵まれた存在になる可能性をもっていた。しかし、このような立場にしながら御米との恋愛事件によって「廃嫡」(四)にまでされかき、宗助は成功者としての道を踏み外してしまう。宗助は御米との恋愛事件によって、彼が課せられた立身出世という義務を果たせなくなってしまったのである。

宗助は成功者に対してどのような心情を抱いていたのであろうか。御米との恋愛事件から作品中現在までの、宗助の成功者に対する心情が以下の部分に描かれている。

学校を已めた当座は、順境にゐて得意な振舞いをするものに逢うと、今に見ろと云う氣も起つた。それが少時くすると、単なる憎悪の念に変化した。ところが一二年この方は全く自他の差異に無頓着になつて、自分は自分の様に生れ付いたもの、先は先の様な運を持つて世の中へ出て来たもの、両方共始から別種類の人間だから、ただ人間として生息する以外に、何の交渉も利害もないのだと考える様になつた。(七)

作品中現在は、伊藤博文暗殺事件が起きた明治四十二年一〇月である。宗助と御米が「いつしよになつて六年ほどの長い年月」「冬の下から春が頭を擡げる時分から始まつて、散りつくした桜の花が若葉に色を易える頃」(十四)という記述から、二人の恋愛事件が明治三十六年の春と推定できる。この期間を大まかにまとめると、約一年半ほど広島で過ごし、福岡で約二年を過ごししている。広島と福岡での生活を合わせるとだいたい三年半を過ごしたことになる。その後、約二年半を東京で過ごし^(注12)ているのである。

自身が途中で大学を辞め出世の道を外れたために、「学校を已めた当座は、順境にいて得意な振舞いをするものに逢うと、今に見ろと云う氣」(七)が起ころ。ここでは、「一度出世街道から外れはしたがまだ修正できる」というような、社会的成功を夢見る宗助の姿を読み取ることができる。この時点の宗助には「諦め」「忍耐」(四)という観念は見受けられない。「活きた現在」と「これから生れようとする未来」(十四)を当面の問題とする、資産家の息子としての宗助が、まだ存在しているといえる。

出世の道を外れた宗助の夫婦生活は経済的な困窮に陥る。御米が佐伯から受け取った屏風を売るために骨董屋を訪れる場面で「広島以来こう云ふ事に大分経験を積んだ」(六)と記されており、二人の生活が始まって以降、御米が生活上の金銭の捻出のために質通いをしなければならなかった程に、経済事情が困窮していたことが窺える。また広島に移って半年ばかり後、父の死後に手にした千円も、福岡へ移住する時にはほとんど使い果たしてしまい、「福岡生活は前後二年間を通じて、中々の苦闘」(四)をしたことが作品中で述べられている。福岡での経済的に厳しい生活の中で宗助は「ひそかに過ぎた春を思い出して、あれが己の栄華の頂点だったんだ」(四)と考えている。経済的に潤沢であった学生時代を「過ぎた春」(四)としてなつかしむことは、〈未来〉に夢を見る行為とは相反するものである。ここにはもはや「活きた現在」と「これから生れようとする未来」(十四)を当面の問題とする、資産家の息子としての宗助は存在していない。ここで存在するのは、自身に義務としてまた権利として与えられた出世の道を外れ、そこに返ることが叶わない社会的失敗者としての宗助である。社会における成功者となりえなかった宗助は、経済的に潤沢であった学生時代をなつかしみながらも、失敗者から抜け出すことのできない貧困に苦しむ現状を受け入れて生活していかなければならない。失敗者の宗助は、有りえた社会的成功者という自分の理想を諦め、貧困という現実に耐えていかなければならないのである。東京で生活する作品中現在の宗助の生活を支えている「諦め」「忍耐」

(四) という観念は、この福岡での生活の頃から生まれたものだと推測できる。また成功者へ対する「単なる憎悪の念」(七) もこのときにはもっていたのかもしれない。

宗助は学生時代の旧友である杉原の尽力によって東京に戻ることになる。杉原は宗助の同級生で、卒業後高等文官試験に合格してある省に奉職している人物であり、宗助が歩むことのできなかった出世街道を歩む人物である。自身の現在に負い目を感じている宗助は「失敗者としての自分」(四) を恥じており、杉原のような「成功者の前に頭を下げる対照^{マツ}を恥ずかしく」(四) 思ってしまう。ここにも成功者になれなかった宗助の苦しみが見受けられる。

杉原のおかげで東京へと帰郷することになった宗助は、東京で役所に勤める「腰弁」(三) としての生活を始めることになる。宗助の東京での生活は、「日当の悪い、窓の乏しい、大きな部屋の模様や、隣りに座っている同僚の顔や、野中さん一寸と云う上官」(二) といった環境で「せつせと働かなければならない」「非精神的」(二) な平日の六日と、その「六日間の暗い精神作用」(三) を回復させるための日曜日とに分かれている。腰弁としての平日と、七日に一度の日曜日とを比較した平岡敏夫は「『奇麗な空』を仰ぎ、『奇麗な床屋』で頭を刈り、『奇麗な』湯に浸るという願望は日曜日ということをぬきにしては考えられないのが宗助の生活である」と指摘し、「日曜日は宗助にとって日常ではない。日常から脱却を試みようとする日」であると論じている。^{注13} 平岡の述べるように、宗助にとっての日曜日は特別なものであり、普段の暗い精神から脱しようとする行動が見受けられるが、宗助は平日の「暗い精神作用」(三) のために多くの希望を日曜に投じようとして「却つてその為に費やす時間の方が惜しくなつて来て、つい又手を引込めて、凝としているうちに日曜は何時か暮れてしまい」(三)、満足に日常を脱しようとする試みを行うことができないのである。それほどまでに東京に移り住んでからの宗助は、「非精神的」(二) な労働のために困憊し「身体と頭に楽がない」(二) のである。

この頃の宗助にはすでに「単なる憎悪の念」(七)という感情は見受けられない。東京に移ったのが二年半前なので、成功者と自分を「別種類の人間」(七)と考え出した「十二年この方」(七)は、東京に移って以降ということになる。成功者と自分を別人種と考える宗助には成功者へ対する憧れも弱くなっている。彼は「妙な物淋しさ」(二)から「懷に多少余裕があると、これで一つ豪遊でもしてみようか」(二)という思考にいたるが、その淋しさも強烈なものではなく、結局行動を起こすことはない。豪遊とは学生時代の資金に余裕のあった宗助が行ったものであり、成功者を象徴するものである。それを起こそうとする淋しさは、成功者への憧れからくるものである。しかし、この時期の宗助にはそれは強いものではなくなってしまう。つまり、宗助の中では、腰弁としての自分を受け入れ、ありえた成功者としての〈未来〉は、完全に切り離されているのである。

ここまで述べてきたように、宗助は六年間での経済的困窮の中で、まるで別人のように変化してきた。成功者への憧れ、もしくは恨みが徐々に薄れていった。そして成功者になることを諦め、腰弁としての現在を受け入れるようになったのである。

三 宗助にとっての子供の死

前章で宗助の成功者に対する感情の変化について述べたが、変化を起こした原因には、三度にわたる子供の死が関係している。この六年間の成功者に対する宗助の心情は「今に見ると云う氣」――「単なる憎悪の念」――「両方共始から別種類の人間」(七)という三段階の変化をしているが、そこに三度にわたる子供の死の時期を当てはめてみていく。

京都を去って広島での「瘦世帯」(十三)を張っている頃、御米は一度目の懐妊をする。宗助はそれを「眼に見え

ない愛の精に、一種の確証となるべき形を与へた事実」(十三)と解釈して喜んだ。学校を退学し出世への道が断たれたことによって、社会的な成功をおさめる道筋からはずれてしまった宗助であったが、夫婦生活においては「和合同棲」(十三)という点で人並み以上に成功していた。そのような宗助と御米にとって、二人の愛の確証となる子供の誕生は、幸福な家庭を築くことに繋がる。宗助はそのことを喜び、目の前に踊る時節を指を折って楽しみに待った。しかし、子供は死んでしまう。その原因となったのは経済的困窮であった。「夫婦の活計は荷い月ばかり」(十三)が続き、貧困のために二人の「愛情の結果」(十三)が打ち崩されてしまったのである。

その後「福岡へ移つて間もなく」(十三)御米は子を宿すが、その子は月足らずで生まれてしまい、「室内の温度を一定の高さにして、昼夜とも変わらない位、人工的に温めなければ不可ない」(十三)状況に陥るが、「煖炉を据え付ける」(十三)ことが経済的に不可能であったために、二人目の子供も死亡してしまう。二度の子供の死が宗助の経済能力の不足によって引き起こされた結果になってしまったのである。

社会的な成功と家庭的な成功という二つの願いが破れたこの福岡時代は、先に述べた「諦め」「忍耐」(四)という観念が宗助に生まれ始めた時期にあたる。「今に見る」(七)という発言に含まれる、成功者という理想の姿への希求はすでに存在していない。宗助は「ひそかに過ぎた春」(四)という過去をなつかしみながら、「諦め」「忍耐」(四)によって生活しなければならぬ。〈未来〉において出世、子供という二つの希望を叶えることができない宗助は、順境にいる者達へ「単なる憎悪の念」(七)を覚えるようになってしまったと考えられる。

経済的な困窮と子供の死によって苦しい生活を送っている宗助と御米は、「御互い同士を頼りとして暮らしてゐた」(四)。そして「諦め」「忍耐」(四)によって苦しい生活が続いていた。そんな生活を送る中で、「東京へ移つて始めての年」(十三)に御米は三度目の懐妊をする。東京に来てからは腰弁としての生活のなかで頭と身体に余裕を失っ

てしまった宗助にとって、夫婦に子供が生まれることは暗い現在の生活から脱する方法である。しかし、その子も臍帯纏落によって死亡してしまう。三度におよぶ子供の死を経験した結果、「この苦い経験を嘗めた彼等は、それ以後子供に就いて余り多くを語」(十三)ることを好まないようになってしまう。

東京に移った年に三度目の懐妊をしているが、「脱脂綿その他の準備も悉く不足なく取り揃えてあつた」(四)という描写から考察すると、御米の三度目の出産は早産ではなかったと予測できるので、出産は約十ヶ月後と考えられる。この三度目の子供の死の時期は恋愛事件の約四年四ヶ月の後であり、作品中現在の明治四十二年十月から「二年」(七)前の時期に相当しているのである。三度目の子供の死の時期と重なる「二年この方」(七)に至り、宗助の中の意識は変化し、以前に抱いていた成功者に対する「単なる憎悪の念」(七)は、この時期に「全く自他の差に無頓着になつて、自分は自分の様に生まれ付いたもの、先は先の様な運をもつて世の中へ出て来たもの、両方共始から別種類の人間」(七)と考えるようになっていく。宗助の中で成功者という〈未来〉への熱意Ⅱ「今に見ろ」(七)が完全に消え去ってしまった。宗助と〈未来〉は切り離された存在となつてしまつていたのである。ここまでの述べた成功者への感情の変化と、子供の死の時期を簡単にまとめると以下ようになる。

感情の変化

子供の死の時期

(京都帝国大学退学後、間もなく)

① 今に見ろ

(①からしばらく)

広島で一度目の子供の死

② 憎悪の念

(一二年この方)

福岡で二度目の子供の死

③ 別種類の人間

東京で三度目の子供の死

このようにまとめると、子供の死が宗助の成功者への感情の変化の要因であったことがわかる。御米との恋愛事件によって社会的な成功への道から外れてしまった宗助は、順境にいる成功者に対して①の感情を抱いていたが、二度にわたる子供の死を経験した広島、福岡時代に②の感情に変化し、三度目の死産によって③の感情に変化しているのである。

子供の死は御米だけではなく、宗助にとっても重要な意味をもつ経験であった。野中家長男として生まれた宗助には、立身出世と子孫を残すという二つの義務が存在していた。しかし、御米との恋愛事件によって出世の道からは外れてしまうが、子供という存在が未来の希望として彼に残っていた。しかし、それもうまくいかず三度にわたり子供は死んでしまう。二つの義務を果たせない宗助は〈未来〉を自分から切り離すことで、苦しみを逃れる生活を送るようになったのである。

四 子供への期待と御米の苦悩

宗助は自己の社会上の失敗があるからこそ、小六に対して自身と同じ轍を踏んではしくないと願い、小六のために「自分が途中で失敗つたから、責めて弟だけは物にしてやりたい」(四)と考えていた。その結果として、小六を自身の家に置くことになるが、これにより、御米は苦しみを味わうことになる。小六が夫婦と同居することがきまり、こ

れまで御米の鏡台が置かれていた六畳を譲ることになるが、ここは御米が御造りに使用する場所であり、また御米が夫の視線を気にせずにいられる場所であった。御米は宗助から子供に関する発言を受けた後、この六畳にひとりで籠る姿が作品中に描かれている。前田愛によってすでに指摘されているように、「御米の居間は、宗助夫婦の住まいのなかでもっとも深い翳を淀ませている場所」であり、この部屋は「御米は宗助すら立ち入ることがゆるされない無意識の深みにその身を委ねる」場所である。^(注14) 御米が宗助に見せない苦しみがあることには注目しておきたい。

福井慎二は「彼等が共有している〈円環的時間〉には実は差異が存在し、宗助御米にとっての意味付けが異なる」と述べ、宗助にとっての「〈円環的時間〉は居心地が良く留まりたい時間」である一方、「御米にとっては、出産・子育てという〈直接的時間〉は獲得したいものにほかならず、出産・子育てのできぬ〈円環的時間〉は脱出したいものであり、二人の方向性は正反対となっている」と指摘している。自身の現在の状況を生み出した過去と、希望の見出せない未来から目をそむけられる平凡な日常という〈円環的時間〉は、宗助にとっては苦痛から避けることができる時間であるが、御米にとっては「妊娠しても流産・死産を繰り返してしまうだけでなく、妊娠しないことさえも指し、まさに苛酷でいたたまれないもの」である^(注15)というのだ。

三人の子供の死という経験は辛いものであり、夫婦の間では語られることが避けられてきた。しかし宗助にとって子供の誕生は、〈今〉の夫婦生活に明るい兆しをもち込むものであり、〈円環的時間〉から脱出し、未来に生きることが可能とするものである。社会的な成功が叶わない宗助にとっては、子供が生まれることは重要な意味をもっているのである。そのような宗助は「小共がないと淋しくつて不可ない」(十三) という言葉に「類似の事を普遍的に云つた覚」(十三) がある。それは宗助が無意識に子供の誕生を望んでいる心のあらわれである。

『漱石作品論集成』七卷(一九九一年一〇月 桜楓社)の「鼎談」では興味深い指摘がなされている。その中で浅

野洋が「門」という小説は夫婦の就寝シーンが非常に多い小説」であることをあげ、夫婦の間で子作りが行われていた可能性を示唆した。それに対し赤井恵子が「御前子供が出来たんじやないか」という宗助の発言をあげ、「ということは、結局子供ができるようなことをしてる」と補足している。

宗助にとって子供は未来の希望であつた。三度にわたる子供の死を経験しても、彼はまだその希望を捨ててはいなかったのである。その希望は夫婦間においては暗黙のうちに了解され、子供を作るといふ行為が持続されてきていたと考えられるのである。

だが、子供という存在が夫婦の希望であるのと同時に、御米にとっては苦悩を与えるものでもあつた。自身を子供を絞殺した「恐ろしい罪を犯した悪人」(十三)と考えている御米にとっては、子供という存在によって責められる結果になってしまつていたのも事実である。日常の中で夫がふいに見せる子供の希求が、御米にとつての苦悩となつていたのである。

六畳の居間を奪われた御米は、これまで宗助に見せることのなかつた自身の罪の意識を、宗助に向かって話すことになる。それまで子供を望んでいた宗助は、そのことが御米を苦しませ続けていたことを聞き、御米に対して子供をつくることを要求できなくなつてしまう。ここで宗助に残された子供という希望は完全に消え去つてしまうのである。

この告白は、我が子を絞殺した「恐ろしい罪を犯した悪人」(十三)としての呵責のみではなく、「易者」(十三)によつて「人に対して済まない事をした」(十三)こと、つまり安井を捨てたという過去に繋がっている。この告白を聞いた宗助は、御米が背負つていた苦しみの原因としての〈過去〉であり、また自身の社会的失敗の原因としての〈過去〉である、安井に対する罪を再び突きつけられることになるのである。

五 御米との愛

『門』は「秋日和と名のつく程の上天気」(一)の日曜日の縁側の場面で始まり、「鶯の鳴声」(二十三)が聞こえ始める春の縁側の場面で終わりを迎える。前作『それから』が「八重の椿」(一)の季節から「燬け付く様に日が高く」(十七)でる季節、つまり夏に展開されていたことを考えると、赫々たる炎火によって身を焼き尽くす恋愛事件を経験した代助のその後を描いた作品のようにも捉えることも可能である。『門』の宗助が、彼と御米の未来を「真赤に、塗り付けた」「生死の戦い」(十四)を経験した時期は、「冬の下から春が頭を擡げる時分から始まって、散りつくした桜の花が若葉に色を易える頃」(十四)で、つまり春から夏にかけてである。『門』における恋愛事件の時期は概ね『それから』の代助に起きた恋愛事件と重なっている。『それから』と『門』の二作品を重ねて読む時、瀬沼茂樹が論じているように「代助の新生をうけつぐ設定^(注16)」とする評価が成り立つだろう。

しかし『門』単体で作品を論じる時には、宗助と御米に起きた恋愛事件の詳細があまり語られないことが、しばしば問題となる。^(注17)はたして宗助と御米の間には愛情は存在していたのだろうか。ここで一度二人の愛情について論じておく。

宗助は安井を通して「これは僕の妹だ」(十四)として御米を紹介された。これが二人の出会いである。宗助と御米は鍵を預けるために退出した安井を待ちながら、二言三言口をきいた。十四章で描かれるこのときの出会いの描写には注目をしなければならぬ。

ここでの語り手は現在の宗助の視点を通して、過去の宗助の記憶を回想している。つまりこの描写の中には、過去における宗助の思考と、現在の思考が同時に存在しているのである。

過去の宗助は、御米との会話が「簡略な言葉に過ぎ」(十四)ないものと感じ、二人は安井という接点があるだけ

の「只の男」(十四)と「只の女」(十四)に過ぎなかった。その時は二人を「人間たる親みを表す」(十四)だけの関係だと、宗助は認識していたのである。二人は路傍ですれ違う関係でしかなく、それは「水のように浅く淡いもの」(十四)でしかないと、当時の宗助は感じていたのである。そのときはただ、親友安井の妹の御米、という関係としてのみ映ったはずであり、「門の前」(十四)に二人佇んでいた時の景色は、当時の宗助には特別なものではなく、何の変哲もないものであった。

しかし、現在の宗助は二人の未来が真赤に染められたことを知っている。その宗助から見れば、二人で門の前に佇んでいる時の景色は、忘れることのできない特別なものである。「彼等の影が折れ曲つて、半分ばかり土塀に映つた」(十四)ことや、「御米の影が蝙蝠傘で遮られて、頭の代わりに不規則な傘の形が壁に落ちた」(十四)のを現在の宗助は記憶している。「少し傾きかけた初秋の日が、じりじり二人を照り付けた」(十四)こと、「御米は傘を差したまま、それ程涼しくもない柳の下に寄つた」(十四)こと、「宗助は白い筋を縁に取つた紫の傘の色と、まだ褪め切らない柳の葉の色を、一歩遠退いて眺め合わせた事」(十四)も現在の宗助は記憶している。御米と二人で門の前に佇んでいる姿は、当時の宗助と現在の宗助にとつて全く価値の重さが異なっているのである。

その日の印象が長く残っていた。つまりその日以降現在に至るまで御米と門の映像は「折々色の着いた平たい画」(十四)として残り続けていた。當時はただ宗助と親友の安井と、その妹と紹介された御米という関係としてのみ映ったはずであり、その一瞬の重要性に気付くことはなかった。

しかし、現在の宗助からみれば、門の前に御米がたたずむ一瞬の風景が、まるで装飾された絵画のように強烈に記憶に残っている理由は明らかである。その風景は現在の宗助からすれば、二人を「焚き焦がした焰」(十四)の始まりであり、その始まりの瞬間を記憶しているのは「今考えると凡てが明らか」(十四)であり、今考えると「何等の

奇」(十四) もないのである。つまり、この門に佇む一瞬の絵画的な風景が、二人の愛の始まりであったのである。

現在の宗助にとって、門の前に佇んだ時の風景が、御米との愛の始まりであったことは自明の事実である。しかし、当時の宗助は御米との間にそのような関係を意識してはいない。では、いつ宗助は御米との愛を意識し始めたのか。

「彼等自身は徳義上の良心に責められる前に、一旦茫然として、彼等の頭が確かであるかを疑った」(十四)、「彼等は彼等の眼に、不徳義な男女として恥ずかしく映る前に、既に不合理な男女として、不可思議に映った」(十四)という記述からは、彼等が互いの愛に対して自覚的ではないようにうけとられる可能性がある。しかし、この描写は愛情が存在しないと読むのではなく、二人がまだ愛情を認識していないととらえるべきであろう。彼等は「徳義上の良心」(十四) をしっかりと頭で理解していたが、しかしその頭の判断に反して、情によって結びついてしまった。

だから「頭が確かであるかを疑」(十四) い、姦通罪を犯した「不徳義な男女」(十四) として彼等が自身を認識するよりも「不合理な男女として、不可思議」(十四) に感じているのである。愛情という自然の力によって彼等は結びつくべくして結びついたために「言訳らしい言訳」(十四) が浮かばない。ここまで彼等は互いを結びつけた愛情を理解していなかったのである。

しかし、暴露の日にはすでに「徳義的に痙攣の苦痛」(十四) を乗り越えている。世間が彼等に背負させた「徳義上の罪」(十四) は彼等に苦痛を強いるものである。しかしその対価として「互いの幸福」(十四) を獲得した。それは二人の自然から生まれ、二人を結びつけた愛情である。二人は「凡てを癒す甘い蜜」(十四) として愛情が存在することを自覚し、進んで愛情を選択したからこそ「痙攣の苦痛」(十四) に戦くことなく、暴露の日を迎えることができたのである。

六 立身出世と恋愛

宗助は立身出世という自分の未来を捨てて、御米との愛を選んだ。それでは『門』の発表された明治時代には、立身出世と恋愛はどのように考えられていたのであろうか。

澁谷知美は、第一高等中学校教頭であった木下廣次の「籠城演説」を（一八八八年）分析し、明治の学生が「性的身体の使用禁止」を言い渡される理由を導き出している。^{（注18）}それは「国際社会、日本社会、故郷の親族」の三つの「まなざし」を意識しており、それぞれ、「西洋から見下されないだけの国を創り、社会の期待どおり国家を支える役割をまっとうし、父兄の期待どおり世間に名をとどろかせるため」であり、それはつまりところ男子学生を「日本を近代化するプロジェクトに参加すること」、そして「個人の立身出世」を勧めることであるという。

つまり、立身出世とは明治政府が、日本の近代化のために行った政策の一部であり、そのために学生たちは「克己勉励」に全力を注がされたのである。

一方、徳富蘇峰の「非恋愛」では、当時の恋愛観を読み取ることができる。これは「國民之友」第一二五号（一九一一年）に発表された青少年の恋愛について論じたものである。その中で蘇峰は青少年の恋愛を批判しているが、その理由は「恋愛の情」と「功名の志」は両立することではなく、「人若し此の聖壇の下に危拜する時には、他物と關涉するを容さざる也、功名をも、志望をも、事業をも」とのべて、「聖壇」＝恋愛が男性の立身出世の妨げとなると述べている。

つまり恋愛とは国の勧める立身出世を阻害する存在ととらえられているのである。

これらの言説は『門』発表の約二〇年前のものであるが、日本の近代化を進めていく中で発生した言説であり、それは宗助とも無関係のものではないだろう。

国家にとって有能な人材を育成するための大学にいらながらも、恋愛によって御米との生活を選んだ宗助は、まさに国の作りあげた立身出世というプロセスを外れた存在である。恋愛事件によって国の意図からそれてしまった当初の宗助は、御米との愛によって支えられながら、社会的成功を夢見ていた。しかし、立身出世の道はずれたために陥った貧困によって苦しみ、それにより御米との愛を証明する存在である子供は、三度にわたって死んでしまう。

明治の近代化の波によって、彼等の愛は重圧を受けているのであり、その重圧をもっとも象徴するものが、宗助にとつての子供の死といえる。この小説で描かれている宗助と御米の生活は、愛とそれを否定する社会との戦いの中で疲弊していく夫婦の姿なのである。

終わりに

本論ではジェンダーやフェミニズム研究で問題となる「子供」という存在を、宗助に当てはめて考え直した。そして、二人の恋愛が立身出世という国家政策との戦いであったことを述べた。

近代化のための国家政策としての立身出世と、それに反して宗助は御米との愛の生活を選択した。そんな夫婦は愛の証明であるはずの子供の三度にわたる死を経験する。さらに小六という〈家〉の問題、安井の接近などさまざまな形で愛の生活を脅かす問題が発生する。たしかにその生活の中で御米と宗助の間で思考の違いが生まれているのかもしれない。しかし、宗助は一度選んだ愛＝御米を捨てることはない。

「又じきに冬になるよ」（二十三）という発言に現れているように、最終章において宗助は不幸が繰り返されることを予測しているが、この不幸は彼等が社会に反した愛によって結びついた夫婦である限り二人を襲い続けるものである。それは宗助が御米と離れる選択をとることがないということであり、彼が社会との戦いを続けていくという意志

表明とすることが可能なのではないだろうか。

注1 「門」——罪からの遁走『夏目漱石』一九五六年十一月 東京ライフ社

注2 たとえば、「わたしは「門」前半の主題（といって不正確ならば、前半に賭けた作者の意図）は、やはり「夫婦愛」の物語をかくところにあつたと考える。」（重松泰雄「門」の意図）『近代文学研究』一九七三年十一月、「ほとんど至福ともいふべき生活」（宮井一郎『漱石の世界』講談社一九六七年一〇月）などがある。

注3 西垣勤「門」「国文学」一九六五年八月

注4 野中夫婦の生活を「見せかけの安らぎの幸福」評した水谷昭夫「漱石的苦悩と罪『門』における運命の偶然性」（『漱石文芸の世界』桜楓社一九七四年二月）、夫婦の間の「デイスコミュニケーション」に注目した中山和子「『門』論——「一つの有機体」神話の隠蔽するもの」（『国文学』臨時増刊号一九九四年一月）などがある。

注5 前田愛「山の手の奥」『講座夏目漱石』四卷 一九八二年二月 有斐閣

注6 高橋秀晴「門」試論『国文学 解釈と鑑賞』第七〇集六号 二〇〇五年六月

注7 たとえば久米依子は、「門」が掲載されていた「東京朝日新聞」では、女性を「良妻賢母」と「悪女」に二分する言説空間で形成されており、「姦通を犯した女である御米は、たとえそれが刑法上の姦通罪は構成しなかったとしても、「世間」の感覚からは、御米や子供が死に至る罰を受けても当然であると見なされる位置にいた」と指摘をしている。（「残酷な母」の語られ方——『門』と出産イデオロギー）『漱石研究』二〇

○四年一二月

注8 石原千秋「反々家族小説としての「それから」」「横浜国文学」十九号 一九八七年三月

注9 沢柳賢二「夏目漱石『それから』論——人間の信頼性への不安を廻って——」「専修国文」第九十四号 二〇一四年一月

注10 若松伸哉は「門」三章の伊藤博文暗殺事件にふれている場面の連載日は一九一〇年三月八日。事件が発生

してからすでに四ヶ月以上経過してはいるが、安重根の公判はその前月、一九一〇年二月に行われており、公判の進展状況など、安重根の報道は頻繁に新聞紙面にあらわれている」とし、『朝日新聞』の第三面に連載されていた「門」と、安重根の報道が行われる第二面とが見開きで隣同士の位置にあり、「伊藤博文暗殺事件と初出時の「門」という小説の新聞紙面における空間的な〈近さ〉は、現在の我々が「門」というテキストを読む上で感じる両者の関係をはるかに上回る心理的な〈近さ〉を持つている」と指摘している。（安重根へのまなざし——漱石「門」と鷗外訳「歯痛」——）「日本近代文学」第七十二集 二〇〇五年九月）

当時の読者にとつて、成功者としての伊藤博文と並列することで、失敗者としての宗助という認識が生まれやすい状況にあったと考えられるが、作品中の「己みた様な腰弁は殺されちゃ厭だが、伊藤さんみた様な人は、哈爾濱へ行つて殺される方が可いんだよ」（三）という宗助の発言を考慮すると、成功者としての伊藤と失敗者の宗助という対立を漱石が意図的に組み込んだことが想像できる。

注11

作品中に「宗助はこの楽天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があった。そうして時によると、自分かもしれない順当に発展して来たら、こんな人物になりはしなかつただろうかと考えた」とある。坂井に対して宗助自身が有り得た自分の姿をみることによって、潤沢な財産を所有し子宝に恵まれている坂井と、貧しい生活

の中で三度の子供の死を経験した宗助の二人の対比がなされ、失敗者としての宗助の姿が露わになっている。

注12 以下に恋愛事件以降、東京に移るまでの年月に関する記述をまとめる。恋愛事件のあと「京都から広島へ行

つて、其所に半年ばかり」(四)して、宗助の父が死去する。その際に一度上京し、広島へ帰ってから「半年ばかり」(四)して叔父の手紙が届き、その「二週間後」(四)に叔父の返事が届く。「三ヶ月ばかり」(四)して宗助が腸チフスにかかり、完治までが三か月。以上から広島生活は約一年半続いたと考えられる。その後間もなく福岡へ移住。福岡へ移って「二年目の末」(四)つまり約二年後に東京へ移住している。

注13 平岡敏夫「門」の構造『漱石序説』一九七六年一〇月 塙書房

注14 前掲

注15 福井慎次「『門』の幾何学紋様 時間意識の構造をめぐる語り手・作者の分裂」『漱石研究』二〇〇四年一月

注16 瀬沼茂樹「『門』」『共立女子大学短期大学部紀要』一九六五年十二月

注17 中山和子は「そもそも御米は安井のどこに魅かれ、どんないきさつで京都についてきたのか、その安井を捨てて、親友宗助を愛するに至るどんなプロセスと葛藤を経験したのか、いつさいが空白である」(前掲)と述べている。また高橋秀晴は、「道義上」とか「離れることが出来なくなつた」といった言い方に注意を向けるなら、二人の間に語り手の口調ほどの能動的愛情関係が結ばれていないことが明らかとなる」(前掲)と述べている。

注18 澁谷知美「立身出世と性的行為の非両立」『立身出世と下半身 男子学生の性的身体管理の歴史』二〇一

三年三月 洛北出版

※本論中の引用は『漱石全集』第六卷 一九九四年五月 岩波書店による。